
想い櫻

はるかば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い櫻

【Nコード】

N7605X

【作者名】

はるかば

【あらすじ】

それは、遠い遠い昔のお話。
桜の精が人間の娘と恋をした。

序

さくらさくら・・・

もうすぐ春が来る

淡い色をした花弁が雪のように風に舞う

静かに、たおやかに

天女のまとう羽衣が風になびくような

そんな幻想を抱かせる春が来るのだ

お前を遠くへ連れていった春が来る

また、春が来る。

- 想い桜 -

「つぼみがついたか」

枝の先に現れた桜のつぼみを見つけて、咲耶さくやは誰に言っわけでもなくそう呟いた。
その瞳は心なしに悲しい光を宿している。

「もう・・・そんな季節なのだな」

そう言った咲耶さくやの瞳は、他のもの・・・そこにはない何かを映し出していた。

あれから何度目の春が来るのだろうか。

「桜乃のづの・・・俺はいつまで待てば良いのだ」

「咲耶様^{さくや}」

どこからか自分の名を呼ぶ声がある。

その声には覚えがあった。

少しか細いが、しなやかで優しい声。聞けば心地の良くなる、そんな声だ。

樹齢五百年は優に超えようかという桜の大樹の上、その幹に寝そべっていた咲耶は、半身を起こすと地を見下ろした。一人の娘が地面から咲耶を見上げている。目が合うと、娘は満面の笑みを浮かべた。

「ああ、やはり。ここだと思いました」

「なぜ分かった」

咲耶は、ふわりと樹の上から娘の前へと降り立った。

「分かります。咲耶様^{さくや}の事ですから」

そう言ってくすくすと笑う娘を見つめていると、愛おしさで気恥ずかしさが複雑に入り混じり、何とも言えない気持ちになった。そんな気持ちを誤魔化す様に、咲耶^{さくや}は娘をそっと自分の方へ抱き寄

せると、上方を見上げ軽く地を蹴った。
その瞬間、娘は慌てて咲耶の着物にしがみつくと、ギュッと目を閉じた。

「着いたぞ」

そこは、先ほどまで咲耶が寝そべっていた桜の幹の上。

娘を腕に抱いたまま、幹に腰掛けたが、娘はまだ目を閉じたまま着物にしがみついている。

しがみついたままの娘に、そう声をかけると、しばらくしてゆっくりと瞳を開けた。

それからきよろきよろと周囲を見渡し、ここがさっきまで自分がいた場所の真上……桜の樹の上だと確認すると、ほっと息をついて、着物にしがみついていた手の力を緩めた。

それから咲耶を見上げると、たしなめるように口を開いた。

「咲耶様！ 急に何処かへ跳ぶのは駄目ですと、以前申したではありませんか」

「…そうだったか？」

「・・・」

あの時、分かったとおっしゃったのに。

咲耶さくやの、どこかとぼけたような態度を見て、半ば拗ねたようにそう呟いた娘は、恨めしそうに咲耶を見つめると軽いため息をついた。
そして、気を取り直すと体の向きを変え、幹の上からの景色を眺め、微笑んだ。

「今日は良い天気なので、遠くまで見渡せますね」

果てまで広がる青い空。

雲ひとつない穏やかな天気。

遠くには濃淡鮮やかな緑の山々。

眼下に広がるまだ咲き始めたばかりの桜と、黄色の菜の花群。

全ての色彩が美しい。

咲耶は娘の言葉に頷くと、目を細めてその景色を見渡した。

そして思い出す。

この娘：桜乃おのと出会ったのも、こんな穏やかな昼下がりだったと。

02（前書き）

回想シーンの中での回想になります（笑）なんて紛らわしい。

「貴方は・・・誰？」

一人の娘が、咲耶を見上げて不思議そうに首を傾げた。

咲耶は、返事に窮した。

思わず周辺の人の気配を探るが、この娘以外、人間の気配は感じられない。

ということは・・・

極めて特殊な状況に、咲耶は、自分を見上げてくる娘をただ見つめ返すことしか出来なかった。

いつまで経っても返事の返ってこない咲耶を見つめながらも、娘は苛立つ風もなく、さらに問いかけた。

「そんなに高い所に上って、危なくないのですか？」と。

しばらくして、咲耶が言葉に出せたのはたった一言。

「...お前は...私が見えるのか？」

娘はその言葉に一瞬不思議そうに首をかしげた。それから驚いたようにどんどんと目が見開かれていく。そして、慌てたようにきよろきよろと辺りを見回した。

「…もしかして、周りには貴方が見えていないのですか？」

その問いに頷くと、娘は一度息を吐いて、自身を落ち着けてからもう一度咲耶を見つめた。それから深々と礼をして見せた。

「初めまして、幽霊様。私は桜乃おうのと申します。」

「・・・」

何という変わった女だと思った。

怯えるでも逃げるでも、ましてや気を失うこともなく、ただ真っ直ぐ自分を見つめてきた女は初めてだった。
というよりも。

自分の姿を实体として見る事ができ、会話までした人間は初めてだ。

咲耶は、得も知れぬ感覚を覚えた。

体がぼうとあたたくくなる　そう、まるで春が来て、初めて桜のつぼみが花開くような…そんな高揚感。

その感情が何なのか、その時の咲耶には分からなかったのだが。

「…あ」

小さく呟かれた声に、意識を目の前にいる桜乃へと戻す。

「これも貴方の力なの？」

「？」

瞳をキラキラと輝かせて、桜乃は咲耶のいる場所よりも少し右上を見上げている。

その視線を追って、咲耶は少し上を見上げた。

そこには、時季外れの桜が一輪、花開いていた。

それから、桜乃は毎日のように咲耶さくやのもとへと現れた。

話す内容は、とりとめのないものばかりだった。桜乃が九割話せば、咲耶は一割話せば良い方…という、一方的な会話だったのだが、それでも桜乃はいつも笑顔だったし、咲耶もそんな雰囲気は苦痛ではなく、むしろ心地良いとさえ思っていた。

本当は、一人でいることが寂しかったのかもしれない。

そう思うようになるまでには、さほど時間はかからなかった。

この五百年余り、一体どのように過ごしてきたのかすら思い出せないほどだった。

目の前に在る光景が移り変わっていく様を、感情もなくなただひたすら見守り続けていただけ。

ただ、村とともにそこに在り続けるだけ。それが、桜の精霊じふんの使命だと思っていた。

なのに。

今まで灰色だった景色が、桜乃が来ると途端に色鮮やかになる。

最初は、単なる好奇心で桜乃に接していた咲耶も、やがて桜乃が来る時間を心待ちにしていた。

桜乃が楽しそうだと自分も楽しい。

桜乃が哀しそうだと自分も哀しい。

桜乃を取り巻く、全ての憂いから守ってやりたい、と。

いつしかそう思うようになっていた自分に気づき、人間と同じように感情をもっている自分に戸惑い、そして咲耶は知る。

これが愛なのか、と。

そして咲耶は悟る。

この愛が実るはずもないことを。

「咲^{さく}耶様？」

呼ばれてふと我に返る。隣を見ると、桜^{おうの}乃が微笑んでいた。

「ほおら、また」

「また？」

桜乃の言葉を繰り返す。

「咲耶様は、いつも何処か遠くを見ておいでになる。私には見えません」

それが口惜しいのです。

桜乃は俯き、そう呟いた。

その寂しそうな表情に、咲耶は思わず肩を引き寄せた。桜乃は一瞬体を硬直させたが、すぐに弛緩させると、その身を咲耶へと委ねてきた。

「私は咲耶様と同じものを見たり、感じたりしたいのです。…それは、私の我が侘なのでしょうか？」

思わず桜乃を見やる。それに気づいたのか、桜乃はゆっくりと咲耶を見上げた。

まっすぐ見つめ返してくるその瞳に、咲耶は言いようのない愛おしさを覚えた。

「・・・我が俤ではない」

「愛」という感情でさえ覚えただけの咲耶には、こんな時何と声を掛けてよいか分かるわけがなかった。

しばらくの沈黙の後、やつと口に出せたのはそんな一言だった。

明後日の方を向き、呟くように紡がれた言葉は、それでも隣に座る桜乃にはちゃんと聞こえていた。

驚いて思わず目を見開いてしまった桜乃は、その後頬を朱に染めて可笑しそうに笑う。

「・・・なぜ笑う」

やつとのことで紡ぎ出せた言葉を笑われ、咲耶は少々慚然とした表情で問うた。

「咲耶様は人間よりも人間臭いお方です。私はそのような・・・顔を真っ赤にした咲耶様を見ることができて嬉しいのです」

「・・・」

なぜだか気恥ずかしく感じた咲耶は、それを誤魔化すかのように桜乃を抱く手の力を強めた。

「ふふっ・・・」

それでも、桜乃がまた可笑しそうに笑うので、咲耶はもはや知らぬ振りをして、桜乃が落ち着くまで明後日の方向を見続けたのだった。

ひとしきり笑った後、桜乃は咲耶と同じように樹の上から村を眺め

た。

「私は、ここから見る景色が大好きでございます」

「…俺も。ここから見える景色は格別だと思っている」

咲耶がそう同意すると、眼下に広がる景色を見つめたまま、桜乃は微笑んだ。

「時代は変わっても、ここからの景色は変わらず、のどかでいて欲しいものでございます」

「…そうだな」

「咲耶様、私は…桜乃は…この命が果てようとも咲耶様のお側にいます」

「…どうしたのだ、いきなり」

桜乃の突然の言葉に面喰らいながらも、その様子がどこかいつもと違うことに、咲耶はようやく気づいた。

決意を込めたような姿に、どこか悲痛ささえ感じさせる。

その真意を探ろうと、幹にもたれていた体を起こし、桜乃の顔を覗きこむ。

だが、桜乃はすぐにまたいつもの柔和な笑みを浮かべた。そしておもむろに咲耶の手を取ると、自分の頬へと導き目を閉じた。

「いきなりではございません。常々、咲耶様に添って生きていきたいと考えておりました。雨がこの地を潤すように、お天道様が作物の恵みを与えてくださるように…私も、咲耶様をお守りし、そして咲耶様に守られて生きたいと…」

そこまで言いかけて、桜乃は言葉を発するのを止めた。咲耶から思い切り抱き寄せられたからだ。

「心配せずともよい。桜乃は、俺が全身全霊をかけて守る。…桜乃が幸せであるためならば、俺はこの身が消え失せたとしても本望だ」

ただ在り続けるだけの存在だった俺に、生きる意味を見出してくれた桜乃のためならば…

強く強く抱き締めると、胸に抱かれたままの桜乃がくすりと笑う。

「咲耶様が消え失せてしまうのなら、私は幸せにはなれません。私は、咲耶様がいるから幸せなのです」

そうならないように、私が咲耶様をお守りしなくてはいけませんね。

桜乃は、そう言うと咲耶の胸に頬を寄せた。

「私が…咲耶様をお守りします」

05（前書き）

桜乃視点の話になります。

「そこをどけ、桜乃」

「いいえ、どきません！」

桜乃の声が凜として響き渡った。

揺るぎない意志を持った声。

その場に居合わせた者達は、思わず息をのんだ。

村の集落から少しだけ離れた、小高い丘の上。

そこに在るのは、樹齢五百年以上の大きな大きな桜の木。

この村の守り神として、ずっとずっと昔から大切にされてきた。

さくら様。

村の皆は、尊敬と愛情、そして畏怖の念を込めてそう呼ぶ。

さくら様は、村に寄り添って、見守ってくれる大切な存在なのだ。

かくいう私も、幼い頃からさくら様の恩恵を受けて育ってきたと思う。

子どもの頃から、落ち込んだりする度に、さくら様の丘へ行き、そこから村を一望できる景色を眺めた。

頬を撫でる風が優しく、木の幹があたたかくて、葉が擦れ合う音

が大丈夫だよって言うてくれているような気さえして。
帰る頃には、元気を分けてもらったような、そんな気分になった。

そんなある日のこと。

丘に着いた私は、さくら様の側に立ち、いつものように村を一望した。

そして、ふと見上げた幹の上に人影を見る。

男性だった。

暗めの茶色の長い髪は結うこともせず背中に流したまま。はしはみいろ 榛色の着流しを着崩して、幹の上にもたれて村の方を見つめている。

あんな高い所の上って、危なくないのだろうか？

その前に。

この村にあんな人がいただろうか？

「貴方は・・・誰？」

身の危険よりも好奇心が勝って、思わず声をかけてしまった。

声を掛けられた男性は、しばらくして下を向いた。そして目が合うと、驚いたような顔でただ私を見つめたのだった。

目が合った瞬間、トクンと胸が鳴った気がした。
それと同時に、彼が消えてしまうような、そんな感覚に襲われた。

だめ、繋ぎとめなくちゃ。

「そんなに高い所の上って、危なくないのですか？」

慌てて言葉を繋げた。

相手に警戒させないように、笑顔を心がけて。

見つめ合ったまま、沈黙。

長かったのか、短かったのか。ようやく、男性が口を開いた。

「…お前は…私が見えるのか？」と。

見える？

最初は、一体何のことだか分からなかった。

そして、ひとつの結論にたどり着く。

普通は「見えない」。

ということは…？

慌てて周囲を見渡したが、そこには誰もいるはずがないので、確認も出来なかった。

仕方なく視線を目の前の男性に戻すと、直接本人に尋ねた。

「…もしかして、周りには貴方が見えていないのですか？」

男性がゆっくりと頷くのを見て、私は大きく息を吐いた。動揺で激しく拍動している胸を落ち着かせるためだ。

少し落ち着いてきた頃、深々と礼をして彼をもう一度見上げ微笑んだ。

「初めまして、幽霊様。私は桜乃おづのと申します。」

「・・・」

彼は、奇妙なものでも見るかのように、困惑した顔で私を見つめた。

そうだろう。私だって、自分で自分が奇妙に見えて仕方ない。

そもそも、幽霊だなんて実体のないもの、怖くないわけがない。

でも、不思議なことに。

彼のことは怖いと思わないのだ。それどころか、なぜだかあたたかく、懐かしい気持ちになり、目の前のこの人が例え幽霊だとしても、もっと話をしたいと思ってしまう。

彼は、ずっと黙ったまま私を見つめていた。真意を見定めているのかもしれない、なんてふと思った。

そんな時。

「…あ」

思わず声を漏らす。

「これも貴方の力なの？」

「？」

男性の少し右上の枝に、季節はずれの桜が一輪、白くて小さい花を咲かせていた。

そして、「幽霊」の正体に思い当たった。

彼は、さくら様だ、と。

それと同時に、先ほど感じたあたたく懐かしい気持ちの理由が分かり、自然と表情が綻ぶ。

そんな私を、彼はさらに驚いたように見つめていた。

それが、彼、咲耶様との出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7605x/>

想い櫻

2011年11月26日17時53分発行